

THE JAPANIZATION OF AMERICA

米国人が初めて書いた

日本化する アメリカ

米全土でどこまで進んでいるか

ボーイ・デ・メンテ

蓬田利文 天川由記子 共訳



日米同時発売!



米国人が初めて書いた

日本化する アメリカ

米全土でどこまで進んでいるか
ポーン・デ・メンチ

蓬田利文 天川由記子 共訳

THE JAPANIZATION OF AMERICA

【著者紹介】

ボーイ・デ・メンテ

1928年ミズーリ州生まれ。49年米陸軍軍属として初来日。同軍退役後、極東研究に専念。米AGSIMを卒業後、再来日。上智大学にて日本語および経済学で学位取得。米国にて出版社を経営する一方、著作活動にも力を注ぐ。著書『日本のビジネスマナーと倫理』『日本百科事典』『消費者としての日本人』（いずれも英文）など。

【訳者略歴】

蓬田 利文

1947年、青森県生まれ。AP通信社東京支局を経て、1977年より著述および翻訳活動に専念。ビジネスから、コンピューター、航空宇宙、建築までの米専門誌の翻訳のほか、映画批評も執筆。

天川由記子（近藤由記子）

1958年、東京生まれ。上智大学卒。米国ミズーリ州立大学、ジョージタウン大学留学。ハシフィック・ウエスタン大学院博士課程終了（国際関係論専攻）。ミズーリ州立大学講師、㈱サイマル・インターナショナル同時通訳者・翻訳者を経て、現在、㈱S・Oプロモーション専属。テレビ、雑誌等でインタビュアー、レポーターとして活躍中。東京サミットの翻訳の他、外交問題に関する論文多数。

日本化するアメリカ

©1986 〔検印省略〕

1986年11月3日 第1刷発行

定価 1,500円

1986年11月21日 第2刷発行

著者 ボーイ・デ・メンテ

訳者 蓬田利文・天川由記子

発行者 杉本 惇

〒102

発行所 (株)中経出版 東京都千代田区麹町3の2 相互第一ビル

電話 03(262)0371 (営業代表)

03(262)5982 (編集代表)

FAX 03(262)6855 振替 東京 1-86836

乱丁・落丁はお取替えます。

印刷/恵友社

製本/高陽堂

ISBN4-8061-0262-8

アメリカ人に新たな衝撃を与える書!

アメリカ本土は、いま急速な「日本化」現象の波にあらわれている。ビジネス、教育、文化、生活習慣などあらゆる領域で、アメリカ人の好むと好まざるとにかかわらず、日本化が進展している。本書は、その「アメリカの日本化」現象を米本土内につぶさに見、それをむしろアメリカの再生のために良い事態として報告した、気鋭のアメリカ人ジャーナリストによる衝撃の書!!

〈著者の言葉〉

困難に敢然と立ち向かい、それを克服するというのは、学びと成長の過程における第一歩である。こうした観点に立てば、アメリカに対する日本の経済的、文化的侵略というのは、アメリカにとつて、建国以来の出来事の中で最良（ベスト）の難事のひとつといえるかも知れない。日本人はわれわれアメリカ人が、自分自身とアメリカの諸制度を新たな光の下で見直すことを迫っている。

（本文より）

日本語版のための「はしがき」

中経出版の編集者から、本書の日本語版のための序文を書くように依頼されたとき、私は、かの有名なアメリカの著述家エリック・ホッフアーのことを思い出した。というのも、この沖仲仕から身をおこした著述家には、こんなエピソードがあつたからだ。

新しい本の原稿を出版社の編集者に渡してから数日後、ホッフアーのところに、ニューヨークから電話がかかつてきた。電話の主はその編集者で、原稿を受け取つたが、語数が三万語しかないで、これでは短すぎる。あと一万五千語から二万語書き足すようにと言つてきたのだ。だが、ホッフアーは応じなかつた。

世の中の大抵の本には、新しいことが一つも書かれていない。それに対して、自分の原稿には、新しいことが三つ書かれている。だから、それだけの語数で出版する正当な理由は十分すぎるほどある。ホッフアーは、そう言つて加筆の依頼を断つたのである。

私の場合には、ホッフアーが言うように、本書に新しいことを三つどころか、一つなりとも書くことができたかどうか、声を大にして申し上げることはできない。しかし、本書の文章全体を通しての私の考え方は、大多数のアメリカ人（もともと本書はそうしたアメリカ人のために書かれた）にとつては、まったく新しいものであると思つている。私はまた、日本の多くの読者には、日米

関係に対する私の考え方を評価していただくと同時に、日本の競争圧力がアメリカ社会に決定的な影響を及ぼしていることを十分理解し、それを受け入れられるアメリカ人がますます多くなってきているということを日本人の立場で知って下さって喜んでいただけるとは思わないか、とも思っている。

私がこの種の（アカデミックというより、むしろ極めて個人的な）本を書いた明確な目的は、二つある。一つは、アメリカはすでに日本から途方もない利益を享受しているのだということについて、なるべく多くのアメリカ人をぎよつとさせ、啓発し、気づいてもらうためである。もう一つは、もし日本人とアメリカ人が、互いに対立し合う代わりに共同して事に処するならば、われわれは将来そこから何を導くことができるだろうか、ということを知ってもらうためである。

一般的にいつて、アメリカ人はインターナショナルな心を持っていない。大抵のアメリカ人は、豊富な天然資源に恵まれたこの巨大な国にあつて、他国や他文化に対する関心を従来ほとんど寄せてこなかったのだ。

このような背景は、アメリカの教育制度の中にアメリカ以外の世界を事実上無視するという傾向を生み出し、この教育制度を通して数世代にわたるアメリカ人が、日本やその他の国々に関する知識をほとんど持たないで世の中に出るといふ結果をもたらしたのであつた。

こうした偏狭な無知は、今日もなお、アメリカのトップクラスの政財界指導者の間にまで及んでいる。その結果、アメリカは、無分別で無効な政治経済政策を実行し、それゆえに、これまで一貫して損害を被つてきているのである。

だが、そうした敵対的な条件の下で生き残り繁栄できる時代は、もう過ぎていく。むしろ、人間集団の精神構造が大きく変わるためには、数十年を必要とすることがよくある。テクノロジーの世界のように、変化が一夜のうちに起こるといふことはあり得ないのだ。わがアメリカにおいても、新しい考え方が社会の中に一般化するには、それが劇的かつ強力なインパクトをもって導入されることでもなければ、やはり多くの年月がかかる。

その意味でいえば、本書の出版は、劇的でもなければ、強力でもないように見受けられるかもしれない。が、しかし私は、本書の影響やインパクトが時とともに増大し、すべての人々が希求する平和で豊かな世界になるために、多少なりとも貢献するであろうことを願っている。

個人ベースでは、日本人とアメリカ人の間の文化的ギャップに橋をかけるのは比較的やさしい。だがこのギャップは、国家意志や国家政策が絡むと、しばしば巨大で底知れないものになる。これは、アメリカと日本の間の文化的差異が、おおよそ簡単に縮まるものではないということの意味している。したがって今後の予測可能な将来について言うならば、アメリカ人にとっても日本人にとっても、両者のあらゆる交渉レベルで膨大な努力が必要になってくるものは、そのギャップを狭めるための教育問題であろう。

本書の意図は、次の事柄に関してアメリカ人を督励することにある。それは、日本について広い心を持つこと、新しい考え方や解釈に対する理解力を持つこと、日米関係の見方を広げること、日本に対してもっと前向きな姿勢になること、これらについて刺激を与えることにある。

アジアの賢人は、どんな危機においても好機があることをわれわれに思い起こさせてくれる。本書によって、ますます多くのアメリカ人が（また日本人が）相互理解と協力の例を打ち立て、世界の一体化に大きな貢献を果たすために、現在ここにある好機をとらえることになれば、というのが私の念願である。

一九八六年六月

ボーイ・デ・メンテ

日本とアメリカは、両国の親密な関係が生まれたのは百年以上も遡るにもかかわらず、互いに誤解し、虐待し、罵倒し合い続けている。日本人は往々にして、外国の企業家や政治家と効果的に話し合えないように見受けられることがあり、一方アメリカ人は、その話し合いをさえ試みないように見受けられる。その結果、両国の間に存在する「苛立ちの限界点」が極めて低くなっている。これは恐るべきことだ。

少し前、アメリカが日本を成熟した近代国家として認め、以後、日本に対するその態度を改めることになるかもしれないと期待されたことがあった。それは、アメリカの「タイム」誌が、「JAPAN: A Nation in Search of Itself」と題して日本特集号（一九八三年八月一日号）を組んだときのことである。同誌は、その特集号の前置きに次のように書いている。

「その国名を聞いただけで、時計の文字盤やキラめくライトや数字群など、現代的なものがただちに頭に浮かんでくる国。神道の祭司（神主）や繊細な詩歌を持つこの国の文明は、同時に、地球上の他のどの国の文明よりも、われわれの時代の新しいものすべてと密接に係わっている。いまでは、こめかみのあたりに白髪が生えようとしているこのアメリカでさえ、将来を見定めるため、また今日の進歩がどこに向かって進み、最後にどんな仕上げをすることになるのか知るために、東の方に

定期的に目を凝らしているのだ」

〔訳注・「タイム」日本特集号は「模索する大國日本」の書名で邦訳刊行されている〕

こうして、少なくとも世界の技術革命の心理的なりーダーシップがアメリカから日本に移ったということが、百語も超えない言葉で認知されたのであった。「タイム」誌は右の言葉に続けて、「他人のインスピレーションを拝借することで有名な、この学びの徒の国・日本は、物真似の国から脱却し、いまや自らをモデルとして模索しなければならなくなったのである」と述べる。ヴァイキングといえば世界を股にかけて荒らし回った北欧の海賊だが、それまでの日本のビジネスマンは、世界のさまざまな言葉を学んで、自分たちの見つけ得るあらゆる新しいアイデアを手に入れようと世界を荒らし回る「東洋のヴァイキング」と呼ばれていたのであった。

「タイム」誌は、日本について、さらにこうつけ加える。「外側から見ると、日本は一九四五年に広島に原爆を投下されて以来、欧米の驚嘆と憤激の的となり、米ソのはざまのプレッシャー・ポイントとなり、世界の軍備なき大國にのし上がった。そして、内側から見ると、社会的、経済的変化をあまりに急速に遂げているので、この国で次に起こる大噴火は、火山のそれではなく、人間の火噴火かもしれない」と。

同誌は次いで、日本の中に併存するもつと顕著な二極分裂、つまり、日本人はなぜ世界の新しいローマ人(かの古代ローマ帝国を築いた)なのかを説明すると同時に、欧米人のわれわれを不可解にもする、互いに正反対なものの取り合わせをいくつか列挙する。すなわち、「階層制の民主主義」、

「混沌とした形式主義」、「束縛された無限」、「無情な（社交上の）礼儀」、「食べさせられ過ぎた力士と自然な発育を抑えられた小さな盆栽の木々」、「孤立への深い恐怖がないまぜになつた強烈な島国根性」などがそれである。

日本は確かに、こういつた互いに矛盾した性格をある程度持つている。だが日本人は、ちょうど柔道の達人が相手の力を利用して技をかけるように、自らの弱点を長所に変えてきたのだ。すなわち、恐怖は、より大きな努力をする動機づけとなり、厳格な形式主義は、集団による努力の有効性に役立ち、大きなものを小型化することに重点を置くやり方は、多くの新製品の創造に結びついてきたのである。

たとえ日本人の中にどんな文化的二極分裂が存在していようと、その能力や向上心や性格を総合したものが日本を経済大国足らしめたのであり、昨今そうした日本の存在が世界中で感じられるようになってきている。

——が、アメリカ以上にそれを強く感じている国は、どこにもないのである。

一九八六年五月

著者

目次——日本化するアメリカ

日本語版のための「はしがき」……………1
はしがき……………5

第1章 新しいローマ人

- 米紙「日本の見苦しい傲慢さ」の社説……………18
日本側の反応……………20
アメリカ変革のリーダーたちは……………23
偶然の一致を超えて……………27
二十数年前のブラック世銀総裁……………32
まさに挑戦への好機……………35
日本熱の「蔓延」……………39
選択し、模倣を……………41

第2章 日米関係は長く深い

日本の影響の起源……48

「アメリカの日本化」の着想……53

鎖国政策の時代に……54

開国——野蛮な西洋人……64

日本の膨脹……67

勝者アメリカ人の姿勢……69

戦後日本の成功は……71

第3章

アメリカの「ビッグ・トーキョー」

目を見張る日本の対米進出……76

アメリカ国内の「日本社会」……78

西海岸で……85

第4章

日本人ここにあり

- 南部および南西部で…………… 90
- ハワイおよびグアムで…………… 94
- 最初の日本人移民…………… 96
- 膨大なハワイへの日本の投資…………… 97
- 「日本化」の将来…………… 99
- 日本の技術的優位さ…………… 104
- 日本の存在感の高まり…………… 106
- ハネウエル社、日本式へ転換…………… 110
- アメリカの二人の英雄…………… 112
- 日本の「出先機関」…………… 116
- 「自動車」問題は…………… 120
- 日本の「自動車産業」発達小史…………… 121
- 「日本（自動車）株式会社」…………… 124

日本技術の導入でメーカー再生…… 127

第5章 日本式やり方とは

アメリカ社会は暴力社会…… 132

日本人の価値感…… 134

「甘え」は香り高き文化…… 136

この正直さはどこから？…… 139

美の探求——日本人の場合…… 142

詩歌のすすめ…… 146

月見の宴…… 149

ノコギリ——押さずに、引く文化…… 150

内なる誇り…… 153

第6章 アメリカ式やり方は

第7章

日本式ビジネスのやり方

- 日本人はアメリカが好きだ…… 156
- 日本刀とハンマー…… 159
- ナンバー・ワンへの道…… 162
- “日本への無知”のわな…… 164
- 日本人とアメリカ人の“国際的視野”…… 167
- アメリカ人にとっての外国語の重要性…… 170
- “会話”でないコミュニケーション…… 174
- 情報の片道飛行…… 177
- 創業者・出光佐三氏…… 180
- 社員の意識は…… 185
- 短気はなんと損気…… 187
- この民主性——アメリカ国内の日本企業…… 188
- 社員の健康管理！…… 193